

# 光へ、未来へ

## ～吹奏楽と合唱のための

### **Instrumentation**

Flute 1 <sup>st</sup>	Trumpet 1 <sup>st</sup>
Flute 2 <sup>nd</sup>	Trumpet 2 <sup>nd</sup>
Oboe	Horn 1 <sup>st</sup>
B ♭ Clarinet 1 <sup>st</sup>	Horn 2 <sup>nd</sup>
B ♭ Clarinet 2 <sup>nd</sup>	Trombone 1 <sup>st</sup>
Bass Clarinet	Trombone 2 <sup>nd</sup>
Alto Saxophone	Euphonium
Tenor Saxophone	Tuba
Baritone Saxophone	Double Bass
Timpani	Drumset
Percussion (Suspended Cymbal、Triangle、Tambourine)	
Piano	Chorus

**すたじお ぱふいか**

## 「光へ、未来へ」 ―この作品について

本作品「光へ、未来へ」は、「春」をテーマに、別れ、旅立ちを歌った歌曲です。この楽譜は原曲に基づき吹奏楽アレンジされたものです。演奏時間は約 3 分半です。オリジナルの弾き語り版と同じ調整(変イ長調)を採用しています。合唱と一緒に演奏できる編成になっていますが、合唱を除いた吹奏楽編成でも演奏が可能となっています。演奏されるそれぞれの団体の実情に合わせて演奏されるとよいでしょう。

### ■ 作詞者より

春になったら口ずさみたくなる言葉を集め、幕の内弁当にしてみました。若葉、鳥の声、空、風、そして光や未来といった素材を、春の王道である別れと希望のストーリーに乗せました。情景としましては、部活などで一緒だった先輩と後輩、旅立つ子供を送り出す親と子供の心境など、若い方にも大人の方の心にも寄り添える作詞を目指しました。これから大人になる方へ、そしてさまざまな体験をして大人になった方へ、この曲が、演奏する方や聴く方の心の支えとなって響く事を願っています。

浦田悦子

### ■ 作曲者より

春というのは、つくづくわたしたちにとって特別な季節なのだと思います。冬を越え、世界が色づき始めていく。そこにわたしたちは希望を見出し、出会い、別れ、出発をそこに重ねていくのでしょうか。「光へ、未来へ」の詞には、いくつもの春が込められています。この春を感じ、ご自身の想いを重ねて、落ち着いて、ちょっぴり大人っぽく、歌っていただきたいと思います。

牛田啓太

### ■ 編曲者より

「光へ、未来へ」のオリジナルを聴いたとき、曲の素直さや詞の暖かさに感動しました。同時に吹奏楽に合唱を合わせて演奏すればまた違った感動が生まれるだろうと思いました。そこで作曲者・作詞者に連絡をとって吹奏楽アレンジをさせていただけないかと交渉いたしました。快くアレンジの許可をいただき吹奏楽版の編曲を始めたというわけです。

間奏や曲の最後には原曲にはない本アレンジならではのエッセンスも加えています。また所々に吹奏楽の良さを生かした工夫も施しております。室内楽とは違った壮大な感動をぜひ味わっていただきたいと思います。

吹奏楽版(合唱付き)は 2013 年 3 月 24 日(日)に神奈川県綾瀬市立春日台中学校吹奏楽部第 15 回定期演奏会(指揮：鎌田拓也)にて初演されております。

鎌田拓也

# 光へ、未来へ ～吹奏楽と合唱のための

浦田悦子 作詞  
牛田啓太 作曲  
鎌田拓也 編曲

Medium slow ♩=80

The musical score is arranged for a large ensemble. It includes parts for woodwinds (Flute, Oboe, Clarinets, Saxophones), brass (Trumpets, Horns, Trombones, Euphonium, Tuba), percussion (Timpani, Drum Set, Suspended Cymbal), Piano, and Chorus. The score is written in 4/4 time with a key signature of three flats (B-flat major or D-flat minor). The tempo is marked 'Medium slow' with a metronome marking of ♩=80. Dynamics range from *f* (forte) to *mf* (mezzo-forte). The score spans approximately 12 measures, with various articulations and phrasing marks throughout.